

「靈魂」とは何か、それが「進化する」とはどういうことを、改めて解説しておきたい。

まず用語の意味を整理しなければならない。日本人は「靈」と「魂」を並べて「靈魂」という呼び方をする。見方によってはそれで問題ない場合もあるが、スピリチュアリズムでは明快に区別している。

それをシルバーバーチの言葉で説明すると——「靈」とは全存在の根源的生命力で、無形・無色、影もかたちもないという。われわれ人間について言えば、身体はどこそこにあるという“場所をもつ”存在ではなく、「しいて言えば、意識です」とシルバーバーチは言うのであるが、この「しいて言えば」と断ること自体が、必ずしも「意識」とは言えない状態での存在もあることを示唆している。

それについては後述するとして——「魂」とは、その靈が自我を表現するための媒体をまとった状態を指す。地上では、物的身体という媒体に宿って生命活動を営んでいるわけで、その意味で、人間も「靈」とであると言ってもよいし、「魂」とであると言ってもよいし、「靈魂」であると言っても間違いではないことになる。シルバーバーチが用語にこだわらずに、ときには矛盾するかのようないい方をするのは、決していい加減な表現をしているわけ

はない。シルバーバーチがわれわれの実体を鳥瞰図的に見ているのに対し、われわれは脳の意識を焦点として考えているので、どうしても視野が狭くなり、字句にこだわることになる。

日本の古神道には「一靈四魂」という思想がある。靈は自我で、その表現媒体として四つの魂、すなわち荒魂・和魂・幸魂・奇魂くしまたまがあるというもので、スピリチュアリズムでいう自我と肉体・幽体・霊体・神体あらみたま（または本体）の四つの身体という説とまったく同一である。

さらには、これらの身体に相応した物質界・幽界・霊界・神界があるというわけであるが、ここではこれ以上は踏み込まないことにする。

さて、自我である「靈」は、無始無終の存在として、単細胞生物にはじまって植物、動物と、その媒体を変えながら進化し、最後に「靈的流入(Spiritual Influx)」という過程をへてヒトの身体に宿る。そして、この段階ではじめて自我意識が芽生える。靈的生命的発達と進化の過程における「画期的飛躍」と呼んでよいであろう。

シルバーバーチが「見ず知らずというわけではない」と述べたのは「意識的には知らない」という意味に解釈してよいであろう。無限の資質と可能性を秘めた靈的生命が、無意識の静的状態から動的状态へと移行し、機能的進化を重ねたあげくに「靈的流入」という飛躍をへてヒトとなり、自我意識と個性をそなえて、精神的ならびに靈的進化の旅に出ることになる。その旅に終点はない

という。

では、本書に掲載されていないシルバーバーチの霊言で、「霊的流入」を考慮してはじめて理解できる一節を紹介しておく。

「いく百万年とも知れない歳月をかけて、あなた方は下等な種から高等な種へと、媒体を徐々に発達させながら、泥のなかから天空へ向けて一段また一段と、ゆっくりと進化してきたのです。

その間、少しずつ動物性を捨てては靈性を發揮するという過程を続けてきました。今あなた方が宿っている身体がそこまで発達するのには、はたして何百万年かかったことでしょう。しかし、まだ進化は終わっていないのです。

そして他方において、魂も進化させなければならぬのですが、それにも、これから何百万年かけることになるでしょうか。

かつて、あなたはサルでした。サルそのものだったという意味ではありません。サルという種を通して顕現した時期もあったという意味です。それも大霊の機構の一部なのです。生命のあるところには、大霊の息吹があります。

それなくしては、生命活動は存在しません。ただ、その息吹に段階的な差があるということです。発達と開発があり、下等な段階から高等な段階への転移があるということです」

シルバーバーチのスピリチュアルな生き方 Q & A

崇高な存在との対話 ハート出版

スタン・バード、ロジャー・グリーン共著